2022.12.9 りそなアジア・オセアニア財団第 10 回環境シンポジウム （於：ウェスティンホテル大阪）

パネルディスカッション講演録

「ゴリラとゾウから学ぶ！～生物多様性とビジネスのこれから～」

（パネリスト）	総合地球環境学研究所　　所長	山極　壽一
	りそなアセットマネジメント株式会社	
	執行役員責任投資部担当	松原　稔
	サラヤ株式会社　代表取締役社長	更家　悠介
（コーディネーター）	総合地球環境学研究所　　教授	阿部　健一

（阿部） まず、ここまでの講演を振り返ってみたいと思います。最初に山極さんが、ゴリラについて話をされました。地球研の所長になられてからも、教育、農業、コウノトリの保全などいろいろなテーマを人間側から話され、最後はゴリラの話へ繋げて終わられます。そのような中で、今日は最初から思い存分ゴリラの話をしてくださいと依頼しましたので、私自身もこれほど纏まってゴリラの話を聞くのは久しぶりだなと思いました。

続いて松原さん。私にとっては聞き慣れない言葉の連続でした。投資は大事だ、ビジネスと生物多様性が繋がっていると頭の中では理解していたのですが、具体的にどのように考えられているのか、短い時間でしたが学ぶことができたと思います。その中で紹介された、昨年ダスグプタさんが出された生物多様性の経済学。私が紹介したのが、ドイツのスクデフ教授のTEEB：生態系と生物多様性。余談で言い過ぎかもしれませんが、これはドイツとイギリスのヘゲモニー争いなのです。環境問題は、多くの人は自然保護の延長と考えるかもしれませんが、現代では国益なのです。ドイツとイギリスが政治的に網の引っ張り合いをしている側面があることも、お伝えしておきます。

森井さんからは、具体的に子どもたちが交流している話を聞きました。我々財団は具体的な活動をしている方に助成していますが、本当に一つ一つ身近な課題を、国際的に展開するといういい事例を紹介してもらいました。

更家さんからは、海洋汚染の話をいただきました。この問題も、生物多様性と間違いなく強く結びついています。資本主義、アダム・スミス、マルクスの話から展開されたお話しも、ビジネスのあり方としてとても大事なポイントを指摘していただいた感じがします。

それではパネルディスカッションに移ります。最初に言っておきます。皆さんは、どうやって纏めるのかと思っておられるかもしれませんが、纏める気はありません。それよりも私は、このお三方が一つの場にいることがとても嬉しいのです。話している内容も、話し方も、使っている用語も全く違う。このお三方が、生物多様性とビジネスというテーマで同じ場にいる。そのことがとても意義の大きいことなのです。生物多様性とビジネス、一見すると遠く離れているようですが、どこかで必ず繋がっている。それをあらためて意識して、具体的にその繋がりを強くしていくにはどうすればいいのか。それを今日参加されている皆さん一人ひとりが考えることが大切だと思っています。

早速始めましょう。山極さんどうですか。松原さん、更家さんの話を聞いて考えたことは。

（山極） 松原さんの話で一番印象に残ったのは、資源と資本は違うという冒頭の話です。資源はどんどん使って減っていくが、資本は蓄積していく。資本主義は蓄積させずに資本を投資していく。それが、人間社会も地球環境も変えていったのです。

その動きが、もう地球が閉じているという時代になり、環境危機、気候変動が押し寄せ、これ以上投資して人間の活動を拡大し続けると、地球がもたない時代になっています。その時に考え直さなければならないのは、資本の扱い方です。私は、資本と資源の違いは何かといえば、資源は蓄積できない。しかし、価値は資本に転換できるのです。だからその価値というものを、もう一度考え直さないといけないということです。

いみじくも更家さんがお話しされたのが、シュンペーターのイノベーション。これは 0 から 1 を生み出すことだけではなくて、価値を新しく作り出すことであり、社会を変革することである。

そこがおそらく焦点かなと思います。

われわれがこれまでやってきた、例えば生態学の立場からいうと、生態系サービスの数値に換算して、それを資本投下して増やそうとしました。しかし、私はこのやり方はあまり成功していないと思います。自然の価値、あるいは人間の暮らしにおいても、数値に変換できないものがある。総合地球環境学研究所では、それを文化だと言っています。

文化と自然は切っても切り離せないものがあり、先ほど日本とマレーシアを ICT で結ぶ話が出てきました。そのとき、それぞれの土地に根付いた文化や、それぞれの自然の中で暮らしてきた子どもたちは、相手の価値に素直には乗れなかったところがあります。そこを、世界のグローバルな動きの中で無理やり数値化して、それを何らかの動きに結びつけ、経済の中に落とし込もうというのがこれまでの動きでした。この世界には数値や単一的な価値に変換できないものがあることを、我々は考えていく必要があると思います。それがゴリラであったり、ゾウだったりするのです。要するに、ゴリラにとっての生態系の価値は、われわれ人間が考えている価値とは違うものです。ゾウが担っている、ゾウが暮らしてきた、進化をしてきた生態系の中での価値は、人間とは異なるものです。それを合わせていくことがこれから必要です。

更家さんがされていることは、一見ビジネスマンに見えますが、土地々々の価値を掘り起こしながら、それが地球全体でうまく回るようにしようとされている気がしました。話の中に SDGs が出てきましたが、勿論一つ一つの目標を企業あるいは金融界がターゲットとみて、そこへ投資をする、あるいは活動を振り向けることは重要ですが、実は 17 の目標それぞれが、トレードオフの関係になっているものがあります。

例えば貧困を解決しようすると、どうしても経済をアップさせないといけない。そうすると生態系を利用しないといけなくなり、そこの価値が減じることになる。そこをどうしていくかは、新しいエネルギーの使い方や、サーキュラーエコノミーという新しい経済システムであり、地球は循環しているという考え方です。

例えばアフリカのゴリラが住んでいる生態系も、アジアのゾウが住んでいる生態系も、それぞれ孤立して全く違う価値観で暮らしを営んでいるわけではなく、地球全体のどこかで繋がっているわけです。それが気候変動や、環境変化に影響していく。その全体の流れと関係性を見抜くのは、やはりわれわれ研究者であり、そういう流れの中で新しいビジネスの動きを作り、地球環境を壊さないように投資していく。

その資源価値というものを、数値に換算せずに、文化というフィルターを通して眺めながら、それぞれの地域の人々や生物の暮らしを保証しつつ、人間がどれだけ豊かになるかを考えていかないといけない。これは非常に難しい課題ですが、金融界とビジネス界、そして研究者の三者が協力してできるところがあると今日感じました。

（阿部） 松原さん、今の山極さんの話を聞いて、価値についてお話しいただけますか。そのうえで、文化というのは資産運用とは縁遠いかと思ってしまうのですが、文化というフィルターを通してというところについてを、ご発言いただければと思います。

（松原） 私は価値についてずっと考えてきました。特に生物多様性、生態系を価値化することは、どういうことかということを考えてきました。

価値化への探求を通じて、結果として貨幣価値化したのですが、これは本当にそうなのかという感覚をすごく覚えました。影響が大きいことは分かったのですが、全てを貨幣で換算することは、無意味ではないかと感じたのです。私たちの成果が無意味だと感じるのは、何かおかしな話だと思うのですが、大事なことは貨幣価値として読み解くことではなく、それが重要なことなのだという思いが至ったことがよかったと思っています。

おそらくこれからのビジネスを考えていく上で、企業の価値とは何かということをあらためて考えていく段階にあると思っています。これまでの企業価値というのは、どちらかというと、どれだけ儲けたかという議論が多かったと思います。先ほどの山極先生の話を踏まえて申し上げると、自然価値を貨幣価値に換算してきた歴史だったからです。

しかし、自然資本は有限だということが大前提になっている昨今において、これからも自然価値を貨幣価値に変換していくことが果たしてこれからの企業が果たす価値なんだろうかということへの戸惑いが生まれてきています。

企業価値とは何かということを紐解いて考えていくと、おそらく阿部先生が最初に話された関係価値が重要なメッセージだと思います。自然には自然の価値があり、社会には社会の価値がある。その価値をあえて「見える化」することではなく、価値があることを理解することが重要だと思います。

先ほどの山極先生の話にあった、それぞれの文化を理解し、考え方を理解して共有する。つまり、他者の価値を理解するということは、自分たちが生まれ育ったところと違う人たちをどう理解するかということと同義だと思います。ただ、これは非常に難しいことだと思います。

企業の価値というのは、これからの企業価値を考えていく中で、企業は企業の価値をどう定義して、どう開示していくのか。そして、金融は更家さんたちが示されていることを金融は資金供給や対話・エンゲージメントで後押しするステージになると考えています。

これまでの企業の持っている価値創造とは、いかに資源を財務価値化に変換することかにフォーカスを当てていた世界から、財務価値以外の価値に対して、価値化に向けて対応を進めていくアプローチも必要ではないかと思っています。
実際、会計の世界でも大きなパラダイムシフトが起こっているのが現実です。
価値をどう「見える化」していくかが始まっています。簡単ではありませんが、そこを少し掘り下げていきたいと思っています。

（阿部） 松原さんから、貨幣価値に換算すること自体に疑問を感じているということを聞き、嬉しくなっています。自然に値札をつけようと言ったのは、TEEB でのスクデフさんの考えですが、それは本当に第一歩であって、これからのことを考えるのにそれだけでは駄目だということです。その上で、企業の価値という言葉を使われました。これは是非更家さんに、考えを披露していただければと思います。

（更家） 山極先生がこの議論の枠づくりとして、価値というキーワードを出されたことに驚嘆して聞いていました。

価値とは何だろうかということですが、昔は土地が穀物など食糧を生産する基盤となり、そこから様々な価値が生まれました。例えば、日本のヨーロッパへの投機は、美術的価値が貨幣価値を生んだものです。ただわれわれビジネスマンにとっては、ものが売れることで価値が実現されます。しかし、アフリカや中東でダイヤモンドや石油を掘って売ることは、それらは有限であり、かつ CO2 排出などの二次的な影響が出てきます。

価値は、一次的な価値や、二次的価値などにより、人によっていろいろ違ってきます。食べて、生きて、暮らすことは人間が最低限実現しなければならない価値ですが、過去にはそれらが実現されていない社会もありました。その状況では資本主義的な動きが否定されることもあまり無かったのですが、社会が豊かになり、今では SDGs が重要として取組んでいます。SDGsの前は MDGs でしたが、そこでは「まだ途上ではものの、教育や民政はかなり良くなった」という報告が出ています。こういったシステムが、価値を生んだのだと思います。

ただし、その価値を生むための価値を、皆さんがそれをどのように理解して買っていただけるのか。市場で取引されるので、大企業の力がとても強く、新たな価値を訴えても負けてしまいます。学者や政治家にも、新しい価値を認めようとしない人が多くいます。

価値を、どのように見出していくか。市場的価値だけでなく、市場価値にはならない大事なものへどう向き合うか。われわれは、ボルネオ、ルワンダなどの熱帯ジャングルで、自然へ向き合いながらビジネスをしています。しかしアマゾンでは、日本やアメリカの企業が、大豆やサトウキビ栽培の大規模開発を続けています。森林破壊の問題は、未だに止まっていません。このことは、結局投資が、売上と利益という尺度で換算されてしまっているということです。一方で環境に配慮している企業も多くあります。パーム開発でも、RSPO 認証をとっている企業はいくつもあります。つまり、隠れ蓑でやっている企業と、まじめにやっている企業があるということです。

価値を市場で換算するとき、一般消費者の力は非常に強いのですが、消費者でも貧しい人にとってはまず食べることが前提になります。そういうことを踏まえて、新しい価値をつくる必要があります。専門家に定義いただき、明確な旗印を作ることで、社会が変わっていく可能性があると思います。

われわれはいま資本主義の世界にいますので、売上と利益を出さなければ、相手にしてくれません。赤字を3期続けると融資を受けることができないのが現実です。ただ現状のままではいけないので、Return On Investment を努力しながら、新しい価値を実現できなければなりません。その為には、価値を図る尺度をもつことも求められます。善意的価値にも様々な価値観があり、文化価値も人により理解が違います。Return On Investment を実現し、ESG 投資をうまく集めながら、社会が良い方向に回るようにしていく。虚構的に取組む企業に対しては、NPO や市民活動されている方々より糾弾いただき、一般の人が認識できるようにしていくことも、非常に有用だと思います。

価値を一つの尺度としていく。それには、長期的価値、短

期的価値、それから地域的価値などもあり、このようなところをもう少し詳しくできればいいかなと思います。

（阿部） 最後に二宮尊徳さんの言葉をひいて、「道徳なき経済は退廃である」と紹介されました。国富論を書いたアダム・スミスも、『道徳感情論』などを出版されている。昔から、やはり倫理というか、そういったことが大事だったのだろうという感じがします。

そして価値です。山極さんは、土地から掘り起こした価値のような言い方をされていたと思いますが、いろいろな価値があります。地域によって価値が違う。そのような中で、いま不幸なことに、われわれ共通の価値はお金しかないのです。そうではない価値、文化が違う中で、違っているけれども一緒になれる。そういった価値が、あるのかないのか。同じ疑問を松原さん、更家さんにもぶつけたいと思います。どうでしょうか。

（山極） 全世界で共通の価値というのは、利他性です。いま正反対のことを阿部さんは言ったのですが、他者が喜ぶ姿を見たい、他者に期待される自分になりたいと思うことは、どこの世界でも共通しています。それは、人間が他の動物と違うところです。

むしろ、人間以外の動物は利己的です。個人の生きる、あるいは繁殖をすることへ、精力を集中している。そのことによって群れが作られ、社会が作られるのです。先ほど講演でお話したように、まずメスが栄養の高い食物を安全に食べるために作られ、そこにオスが加わって、それぞれが利己的にふるまいながら、自分の利益を最大化しようとして群れを作るわけです。自分の利益が落ちたら、集団を離れるのが動物です。

しかし、人間は逆で、自分の利益を貶めても仲間のために尽くそうとする。人間はそういう社会性があったので、これだけ大きい社会を作ることができた。それは世界中どこでもそうです。

それを、われわれは人間以外の動物や植物にも向けたわけです。それが家畜になり、栽培植物になり、世界中の動植物の知識を得て、そこと共存しようという傾向を持ったので、その歴史を忘れてはいけない。

いま世界はグローバルな社会になり、分業体制が敷かれています。つまり、発展途上国は、自分たちの腹を満たすものを作れていないのです。換金作物を作って世界市場に出し、国際企業にその価格を牛耳られ、自分たちの食べるものは逆に輸入しているのが現実です。価格を全て国際企業に握られて、いくら働いても貧しくなる仕組みになっています。

その中で、現代の科学技術は、個人の能力を伸ばすように働きかけています。その恩恵を受けるのは先進国の人たちです。いろいろな科学技術を使い、さまざまな自分の能力を伸ばしていく。しかしそこには、利他性を忘れ、自分がのしあがることが幸福や成功につながるという考え方が根本にあります。

しかし、個々の地域の文化は、未だに利他主義に基盤を置いています。それを忘れたのは都会なのです。先ほど松原さんが講演で、世界人口は 80 億人を超え、その半分は都市に住んでいると話されました。都市は地域の自然に根差していないのです。工業的時間、生産と効率性による考え方に乗っ取られてしまっており、個人の生き方も、管理される時間の中でいかに最大限の利益を上げるかに邁進しています。少し極端な話ですが、そのことは、日本の 1980 年代に出てきた自己責任という言葉に象徴されています。田舎や地域、あるいは発展途上国では、そうではないのです。

私が価値という問題を持ち出したのは、実は食糧問題では日本の食物自給率は 40％以下であり、そういう意味では日本は発展途上国なのです。世界から食物が来なくなったら、たちまち日本人は飢えてしまいます。日本で自給できているのは、米と魚ぐらいです。それを脱するには、サーキュラーエコノミーや地域循環共生圏など、自分たちの食物は自分たちで賄う経済モデルを作ることが必要です。余剰の作物は世界へ回したり、積極的に売っていくのですが、まずは自分たちの食生活を豊かにしなくてはいけない。

その素地は、歴史的にあります。江戸時代 300 年近く、日本は鎖国をしました。その間は、自給自足だったのです。循環と節約によって成り立っていました。その根本的な日本人の道徳が、儒学です。同じ時代に、ヨーロッパは世界を侵略したのです。領土を広げ、自分たちの思うように発展途上国を牛耳ることが、ヨーロッパでは当たり前の戦略になったのです。

アジアは、そうではありませんでした。何故かというと、アジアには、自足できるだけの食糧が全部あったからです。ヨーロッパにはそれがなかったので、海外に乗り出したのです。今日更家さんが話された東インド会社が、まさにそうです。あれは、不平等な契約を結ぶため、オランダ、フランス、イギリスなどが挙ってアジアにやってきました。

そういう歴史観の中で、われわれはいま当たり前のように、先

進国と発展途上国の格差、それはまさに世界分業体制を敷いて、先進国の人々が後進国の人たちへ食料を作らせているという現実を受け入れてしまっています。これは、どこかで価値観を変えてひっくり返さないといけないことです。

それは、共産主義になれと言っているわけではありません。生産性と労働の考えを、労働の楽しさ、そして地域に住む楽しさなど、もっと大きな価値を見出すべきではないかと思います。日本は少子高齢化で、地域がどんどん過疎になって経済が低下し困ったと言っていますが、その価値観は以前の資本主義のままです。本当にこれでいいのでしょうか。日本の人口が縮小していくのは当たり前であり、そこへ新たな価値を見出さないと、また都市に人口が増えて、地域の過疎化が更に進む。日本の中だけでも、この価値観を転換しないと大変なことになると思います。

（阿部） 山極さんは今日ゴリラの話をしてくれましたが、なぜゴリラの研究をしているかというと、人間を知るためにまずゴリラの研究をということなのです。その人間の貴重な資質と言えばいいでしょうか、利他性という言葉。これは本当に大事なことだと思います。それを踏まえたうえで、サーキュラーエコノミーのこと、歴史を振り返って江戸時代、そして欧米とは少し違う考え方が日本に根付いているのではないかとまで示唆されました。

いまの山極さんの発言を受けて、更家さん、次に松原さんという順番でお伺いします。

（更家） とても説得力があるお話しでした。ただわれわれビジネスの立場からいうと、江戸時代は儒教でしたが士農工商があり、金を扱う人間、商人は一番下で、むしろ金は汚らわしいという社会でしたので、価値観は少し違っていました。

ヨーロッパも以前はキリスト教の世界で、お金のことよりも、「私の価値は神に奉仕することです。あなた方も神に奉仕するために一生懸命やりましょう」という考え方が元にあったのですが、資本主義の出現で変わってしまいました。

その資本主義が、武器を作ってアジアへ攻めてきて、徹底的にやっつけた。日本もやられかけたのですが、西欧を学んで富国強兵で追いかけた。ここが他のアジアの国と違っていたところです。中国は、自分たちがナンバーワンだという中華思想を持ち続け、今では大きな国力を持ちました。

そう考えたとき、例えばヨーロッパが攻めてくるとき、武器や生産要素も含めて、社会に力を持ってくる。これが発展途上国では売るものがなく、何かを売らないとテレビも買えません。だからアダム・スミスは、分業と交換が富を生むと言っています。確かに山極先生が話しされた、お金という単一価値がアグレッションに変わり、文化的破壊や地域的な資源破壊へ繋がり行き過ぎであることはそうだと思います。ただ途上国のクローズな世界に入っていくと、リーダーが周囲を騙して資源を売り飛ばし、プライベートジェットを所有して飛んでいく姿は、アフリカでよく見られます。これは単純な問題ではないと思います。

そういう意味で言うと、やはり利他というのは非常に日本的精神です。他人のことを思うことは大事だし、ヨーロッパにもそういうことはあると思いますが、われわれの立場では、やはり経済的なところを通じて進歩していくしかない。サステナブルな進歩に繋がるようなお金の使い方とか、新しい価値をわれわれが生むべきです。そういうものを作っていく時代がいままさに訪れていると思います。ティッピング・ポイントと言われており、早くやらないと後戻りできません。われわれは、そういう危機感を覚えつつ活動しているのが現状です。

先ほどイノベーションの話をしました。一人一人のイノベーションは小さいかもしれませんが、イノベーションがイノベーションを生んで大きくなると、社会を変えていく力にもなります。イノベーションを起こしていくところへお金が集まり、イノベーションを社会のために活用するところへさざ波を起こしていくことが、私の考えていることです。

（阿部） 松原さんには、質問という形で。投資あるいは資産運用には、どこかで利他の精神があるのかどうか。

（松原） もともと投資は価値創造のためというのが昔からあったのですが、当然、投機と投資は違います。投機は結局、ゼロサムです。投資はプラスサムということが、よく言われています。そういった意味では、投資をすることによって、豊かさを支援していこうというのが、本来の目的です。

でも、豊かさってなんなのだろうといったときに、先ほど申し上げたように、マズローの段階的欲求説に立てば、物質的欲求の世界だったと理解しています。それが昇華していくことによって、物質的欲求から存在欲求へと変わっていく。最終的には自己超越の欲求になることが、先ほど山極先生が話された、

利他の世界につながってくるのだろうと思います。

ただ、私が一つ気になっているのは、人間は利他である、利他性があることが重要だと話されましたが、利他が逆に戦争を引き起こしているのではないかという気がしています。

戦争はなぜ起こるかというと、いくつか理由があろうかと思いますが、その一つ憎悪があります。その憎悪は何によって引き起こされるかというと、自分がいじめられたからというよりも、親が殺されたからとか、地域の町が破壊されたとか、自分のためではなくて、仲間がこんな酷いことをされた、それが憎悪に変わって戦争という悲劇を導きだしているのではないかと思います。そうなると、利他というものを追求することの先は、共栄なのか、破滅なのかということを、少し感じてしまいました。

（山極） まったくそのとおりで、私は戦争というのは共感の暴発だと思っています。去年、ブレグマンというオランダの歴史家が『Humankind 希望の歴史』という本を出して、これが評判になっています。彼は、人間は善であるということを前提にして社会を作らないといけないと言っています。

実はこれまで、人間の本性は悪であるということが常識になっていた。だから強大な権力が必要であり、まさにこれはトマス・ホッブズが言ったことです。政治家は特にそれを悪用するというか、「放っておいたら侵略されてしまう。ロシアとウクライナを見ると、国の安全保障を考えないといけない」と言うのですが、ブレグマンは、本来人間は善なるものだとしています。

ただ戦争は、友情から来ていると言っているのです。つまり、血縁関係のない赤の他人であっても、自分の知っている、過去に親しく付き合ったことのある友達たちが、不幸な目に遭った。殺された。そういうことに対する復讐をしたいという気持ちが、ほぼ戦争をする動機になるとしています。

私もそれは確かにそうだと思います。つまり、集団の内向けには共感力をもって、利他性を発揮してみんなが助け合うのだけど、外に向けてはそれが逆に敵意になるのです。その矛盾をどうやってこれから人間は解決していけばいいのか。

私の持論では、いま人類の心身は、身体も心も、まだ狩猟採取生活にあって、人間の脳の大きさはせいぜい 150 人ぐらいの小規模な集団で暮らすようにできている。ただこれが、農耕牧畜が始まって以来、1 万 2 千年以降ですけれど、急速に、特にこの 100 年間で人口は 4 倍になりました。この 50 年間で人口は 2 倍になりました。急速な拡大をしてしまっている社会の中で、心身がうまく適応できていないのではないか。そのミスマッチというのが、さまざまなトラブルを起こしているのです。それは国内でもそうだし、国と国との関係もそうです。そこをまだ、うまく人間の倫理というものを駆使して、コントロールできていないのが現状ではないかと思います。

（阿部） いや本当に、自分の身近な人を殺した相手と一緒に共存できるか、そういったことをふと思いました。乗り越えないといけない課題というのは、ありますね。

（山極） 私は、それを解決する手段は交流しかないと思っています。

（阿部） 交流。ビジネスを意識して交易と言ってもいいかもしれない。

（山極） 今日森井さんが動物園の話をしてくれました。動物園は動物を虐待しているのではないかと言う人もいますが、人間と動物が交流できるまたとない機会を提供してもらっています。野生動物と人間は、あのようには交流できません。交流することによって、人間は動物という世界を知ることができる。そのことにより、向こう側から自然や人間を眺めることができるようになり、価値観が変わるのです。同じように、地域の違う、違う文化で育った人たちが交流して、お互いの文化を完全に理解できないまでも、入口に立てることが、やはりそういうコンフリクトをなくしていく大きな手段だと思います。

会社においても、外国人を採用したり、海外に支部を作り日本人を派遣するなど、人間として分かりあえる土壌を作っていくことが重要ではないかと思います。そのためには、ICT を利用してよかったという森井さんの言葉は、成程とうなずける気がしました。

（阿部） 交流というのは、山極さんがよく言っている、社交と言い換えてもいいのかな。

（山極） そうですね。できれば、身体を共鳴させるような対面の交流が望ましいけれど、でもやはり世界中の人たちが一カ所に集まることはできないので、それは情報通信技術を使っていくという方法が効果を発揮すると思います。

（阿部） 更家さんも、ウガンダで、あれは食堂といっていいのでしょうか。そういった交流事業をされておられるようですが。

（更家） あれは投資のみしており、運営は宮下さんという京大の人文科学出身の方が行なっています。もともと利他の気持ちが強くウガンダのためにということで、有機農業を始めました。京都に有機野菜の宅配事業をやっている坂ノ途中という企業があり、下請けとしてゴマを栽培させ、ゴマ油を絞って京都へ送り売っていました。有機野菜を作り大使の奥様方に売ると高く買ってくれるのです。次のフェーズでは、レストランをやっていくようです。先ほどの件で、一言よろしいですか。

（阿部） どうぞ、お願いします。

（更家） 戦争は、いま言われた憎しみとかで起こることが非常に多いと思います。しかし、大きな戦略的に利権を取る、領土を取るなどもあり、そういう人が往々にして使うのが、テロです。誰かを殺させ、国民や地域の憎しみが湧くようにして戦争を拡大させる。これは常套手段であり、こういうところを一般の人はもう少し冷静に見ていかないといけません。

北朝鮮は、明らかに体制維持のために緊張と戦争を仕掛けていると思います。やりすぎると滅びてしまうため上手くやっていますが、われわれは憎しみが湧かないような交流や方法を考えないと、巻き込まれてしまいます。

日本はもう絶対に戦争を起こしてはいけません。ウクライナは、明らかにウクライナ東部とクリミアを奪って繋げようとするプーチンの野望であって、そのような独裁者が出てくると危険です。テロを起こさせて、憎しみが一般的に燃え上がってくると、必ず戦争につながっていきます。レジティマシーというか、正当化させられるので、注意しておかないといけない。いまそういう時期だと思います。

（阿部） 大事な視点です。山極さん。

（山極） ウガンダが出てきましたので、一言だけ。昔 2006 年にウガンダのエンテベで国際霊長類学会が開催され、その時にムセベニ大統領を呼んだのです。冒頭演説で大統領が、霊長類、サル、類人猿と、自然の姿は、ウガンダ人の誇りだとして、それを守っていくには、最先端の科学技術を持ってこないといけない。科学技術を都市に使うだけではなくて、地域の自然と人間の共生のために使ってほしいということを言ったのです。私はそのスピーチに、結構感動しました。

科学技術というのは、技術に頼る暮らしを高め、技術を人間の周りにはべらせて人間が楽しい暮らしをするためにあるのではなく、人間と自然が共生するためにもあるのだということです。

そのような技術を開発していかなければならないし、それを価値観の転換へ使っていかなければならないのではないかということを、その時に強く思った記憶があります。ウガンダは、まさにそれができる場所なので、ぜひ更家さんにはそこを推進していただきたいと思います。

（更家） ウガンダ西側のルワンダでも、ゴリラのツアーをやっています。先ほどご紹介した森井さんのボルネオでも、盛んにやっています。ただ森井さんのお話を聞いていると、やはり村人の生活のために森が削れていくのです。そこでウガンダ政府と話をして、ここに何百ヘクタールほどの里山的なものを作ろうという運動をやっています。

しかし、地元では子だくさんなこと、畑も作らないといけないとなると、どうしても自然を侵食するエネルギーがでてきます。これをどう解決するかはまさに縮図的なものがあり、ウガンダでも一緒です。観光をやりすぎると、ゴリラに病気がうつったりします。セピロックという、オランウータンを見せている保護園があります。ランカウイはゾウ、セピロックではオランウータンと住み分けをしています。そこへ行くと、入るときには必ず手を消毒しろと言われます。ここが非常に難しいところです。山極先生に、ウガンダへ是非叱咤激励に来ていただきたいと思います。

（山極） ありがとうございます。

（阿部） 山極さんの言葉に戻ろうと思います。人と自然の関係性の技術、人と自然の技術。それの言葉を少し、農業というところへ持っていきたいと思います。先ほど更家さんも、食と農の話をされました。それで松原さんに聞こうと思っているのですが、松原さんは農水省の生物多様性戦略検討会に参加されておられます。環境省とは、違う視点があるかと思います。どういうところへ焦点を当てているのか。少しその委員会での議論も踏まえてご発言いただければと思います。

（松原） 議論は白熱しているところではありますが、自然の恵みというものは農林水産業には不可欠なものであることの理解から進めています。しかも単にそれを保全するだけではなく、どういう形で共生していくのかも議論しているのですが、大事なことはこうした委員会に金融が入ったことに意義があります。これまで、生物多様性戦略検討会のような自然資本にかかる委員会に金融が入ることはまずなかったのです。検討会の重要なところは、先ほど山極先生が話されたように、交流だと思います。

交流ということは、私たちの言葉で対話というのですが、交流をすることによって、相手の価値観を知ることができることと、私たちの価値観を伝えるという、双方向で機能します。

ただそれは非常に怖い話で、相手の価値観を受け入れられなければ、たぶん交流にはならないのだろうと思います。相手の価値観を受け入れる、最近の言葉でインクルージョンとも言いますが、そういった話はすごく大事です。だからこそ、その相手の価値観を受け入れる心を自ら養う必要がある。交流するとき、おそらく自分にとって準備された心がなければできないと思っており、そこの世界を金融の中でもそのような状況に昇華していかなければなりません。

一方、懸念していることとして、それをシステムにしてしまおうという動きがあります。例えば TCFD とか TNFD というのは、ある意味それを金融やビジネスの枠組みに適応したシステムであり、これを一義的に導入するのは大事なことかと思いますが、これに固執してしまうと、たぶん本質的なものが見えてこないような気がします。

先ほど更家さんが破壊的創造について話されましたが、ある意味システムを作ることで効率性を生み出すことができるのは、われわれの知恵だと思っています。そしてこれを維持しようとしたときには、おそらく本質的なものが見えなくなる可能性がある。そうした場合に、システムを壊す必要も出てきていると思います。システムという世界で思考停止になるという怖さを、私は感じています。

システムは依存することではなく、交流する手段であると思いますし、その先にある価値とは何かといったときに、まだまだ漠然としているのですが、この存在がないと困る度合いかなと思っています。例えば更家さんのサラヤがなくなったらどう思うかといったときに、どれだけ困り感があるかというのは、逆説的な発想になりますが、価値だと思っています。それは数字では表せきれませんが、実感として分かる気がするのではないかなと考えるのです。

これは非常に難しいです。分かったようで分からない世界だと思うのですが、この「気持ち悪さ」というのが、本質を探っていくうえで大事だと思います。

（阿部） 山極さんどうぞ。

（山極） いま松原さんが話しされたことで気になったのですが、私が日本学術会議の会長の時に、3 年間毎週のように内閣府の総合科学技術イノベーション会議に出席していました。その時にさかんに言われたのが、破壊的イノベーション。ただそこで議論になったのは、その「破壊」という意味でした。

それはスクラップ・アンド・ビルドと言われているが、どうもそうではないのではないか。つまり、シュンペーターの言っているイノベーションは、別に破壊することを意味していない。破壊「的」なんですね。これまであったものを、違う価値観でもって組み合わせて、新しい価値観を生み出すことがイノベーションだとシュンペーターは言っていました。そこが重要で、いまその企業が無くなったら本当に困ったことがあるというのが価値観だとおっしゃったけれども、実は僕が親しく付き合っている企業の会長は、「寡占率は、うちは 40％でいいと思っている」と公言しています。なぜかというと、あまり独占してしまうと、潰れたときに大変なことになる以上に、イノベーションが起きなくなる、つまり守りに回ってしまうというのです。

そうではなく、どんどん新しいことを考えて、好敵手になるような企業が幾つかあるからこそ、互いにイノベーションを起こして競争していく。そういう気持ちにならないと駄目なのではないだろうか。日本でユニコーン企業が広がらないのは、日本が世界の GNP でアメリカに匹敵するようになった時に、日本人が安心してしまった。そこで日本の強みを誤解した。

日本の強みというのは、実は過去にあるのです。それは今年生誕 100 周年を迎え、3 年前に亡くなったドナルド・キーンさんが、日本人の驚くべきことは、過去を捨てていないことだとおっしゃるのです。

18 世紀の服を、ローマ人もパリ人も着ていないし、羽根ペンなども使っていないし、そんな家にも住んでいない。しかし日本は、室町時代に作られたような服をまだ着ていて、毛筆を使って字を書いている。日本庭園と日本家屋に住んでいる。世

界の人から見るととても不思議なことに見えることで、日本人は過去という財産を完全にスクラップにしていない。遺跡にしていないからこそ、今後いろいろなことを成し遂げるヒントを現代に持っているということを話されていたのが記憶に残っています。やはりこれから日本が世界の先端に立つためには、そういうものもうまく使ってイノベーションを起こさなければならないのではという気がしたので、お伝えしました。

（阿部） シュンペーターの新結合をもう少し深掘りしたかったのですが、時間がありません。ゴリラの幸せがわれわれの幸せと繋がるような、そういった遠く離れたものが結合することによって、イノベーション、新しい価値が生まれてくるのだと思います。遠いようですが、必ず実現できるのではないか、そんな気にさせていただきました。

最後に、お一人 1 分で、皆さんへメッセージをお伝えいただければと思います。更家さん、松原さん、山極さんの順でお願いします。

（更家） 農業とか漁業が、非常に大切だと思うのです。このごろ若い人が農業をして、結構売上や利益を上げている人がいます。これは大切なことで、生物多様性にも直結します。農薬を使い過ぎていなくなったコウノトリが、無農薬になると帰ってきました。魚も獲りすぎるとサンマのようになってしまうので、やはり資源をサステナブルに利用していく配慮が必要になります。

農業漁業を日本の新産業にしていくことをわれわれはやっていきたいし、是非若い方々がこれを引き継いで、イノベーションを起こす。山極さんが言うように、日本はあまり海外に頼りすぎるとリスクが多いので、日本的な食をこれからやっていくのが新しいビジネスのフロンティアだと、最後に、生物多様性と農業という意味で提言します。

（松原） 金融というと、経済の血液であると言われています。血液にどのような役割を担わせるのかということを、そろそろ皆さんと一緒に考えたいと思っています。

例えば、血液に魂を持たせるべきなのか。生物多様性における金融の役割というのは、単に血液循環を回すということだけではなくて、血液としてどんな世界を作っていきたいかがあってもいいのではと思っています。これからの金融のあり方、金融が果たす役割。それは、これまで通りの役割と、これから必要とされる役割があるのかなと思っています。今日の生物多様性のセミナーを通じて、あらためて金融の役割とは何かということを考えさせられたいい機会だったと思います。ありがとうございました。

（山極） 私は、日本人は社交の達人だと本当は思っています。これまでは言語の壁があって、なかなか海外の社交を牛耳れなかったのですが、実はその社交の達人である所以というのは、遊びの多さです。遊びの達人だからこそ、さまざまな時間を楽しく過ごす技術を持っているのです。その中に、イノベーションも生まれます。

日本人というのは、あらかじめ価値を決めてしまうのではなく、遊びの中でいろいろな価値を組み合わせながら創作していく。その能力を非常に高く持っている民族だと思っています。そのことをもう一度思い直して、それをもっと多用していく。いまで言えば、アニメーションとか漫画とか、パラレルワールドを作る技術になりますが、それを詳しく言う時間はありませんので、言葉だけ言っておきます。それを世界に示して、一神教で一つの価値しか持っていない民族の人たちを、複数の価値に目覚めさせるということを、日本はこれからやらなくてはならないのではないかと思っています。ちょっと大それた話ですが。

（阿部） 最初に申し上げましたように、纏めるようなことはいたしません。一人ひとりがこれからも考え続けなければいけない。そのためのさまざまな視点を与えてくださった、壇上の 3 人の方、そして素敵な事例を紹介してくださった森井さんに感謝を申し上げて、パネルディスカッションを終わりたいと思います。

（終了）